

6:8 さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとするしを行っていた。
6:9 ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤ
やアジヤから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。

6:10 しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。

6:11 そこで、彼らはある人々をそそのかし、「私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを
聞いた」と言わせた。

6:12 また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕らえ、議会にひっぱって行った。

6:13 そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。「この人は、この聖なる所と律法とに逆らう
ことばを語るのをやめません。

6:14 『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』
と彼が言うのを、私たちは聞きました。」

6:15 議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように
見えた。

7:1 大祭司は、「そのとおるか」と尋ねた。

7:2 そこでステパノは言った。「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、ハ
ランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、

7:3 『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。

7:4 そこで、アブラハムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。そして、父の死後、神は彼を
そこから今あなたがたの住んでいるこの地にお移しになりましたが、

7:5 ここでは、足の踏み場となるだけのものさえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。
それでも、子どももなかった彼に対して、この地を彼とその子孫に財産として与えることを約束され
たのです。

7:6 また神は次のようなことを話されました。『彼の子孫は外国に移り住み、四百年間、奴隷にされ、
虐待される。』

7:7 そして、こう言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしがさばく。その後、彼らのはがれ
出て、この所で、わたしを礼拝する。』

7:8 また神は、アブラハムに割礼の契約をお与えになりました。こうして、彼にイサクが生まれました。
彼は八日目にイサクに割礼を施しました。それから、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブに十二人の族
長が生まれました。

7:9 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売りとばしました。しかし、神は彼とともにおられ、
7:10 あらゆる患難から彼を救い出し、エジプト王パロの前で、恵みと知恵をお与えになったので、パ
ロは彼をエジプトと王の家全体を治める大臣に任じました。

7:11 ところが、エジプトとカナンとの全地にききんが起り、大きな災難が襲って来たので、私たち
の父祖たちには、食物がなくなりました。

7:12 しかし、ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、初めに私たちの父祖たちを遣わしました。

7:13 二回目のとき、ヨセフは兄弟たちに、自分のことを打ち明け、ヨセフの家族のことがパロに明ら
かになりました。

7:14 そこで、ヨセフは人をやって、父ヤコブと七十五人の全親族を呼び寄せました。

7:15 ヤコブはエジプトに下り、そこで彼も私たちの父祖たちも死にました。

7:16 そしてシケムに運ばれ、かねてアブラハムがいくらかの金でシケムのハモルの子から買っておい
た墓に葬られました。

7:17 神がアブラハムにお立てになった約束の時が近づくにしがって、民はエジプトの中にふえ広が
り、

7:18 ヨセフのことを知らない別の王がエジプトの王位につくときまで続きました。

7:19 この王は、私たちの同胞に対して策略を巡らし、私たちの父祖たちを苦しめて、幼子を捨てさせ、
生かしておけないようにしました。

7:20 このようなときに、モーセが生まれたのです。彼は神の目にかなった、かわいらしい子で、三か
月の間、父の家で育てられましたが、

7:21 ついに捨てられたのをパロの娘が拾い上げ、自分の子として育てたのです。

7:22 モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。

7:23 四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。

7:24 そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の仕返しをしました。

7:25 彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みな理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。

7:26 翌日彼は、兄弟たちが争っているところに現れ、和解させようとして、『あなたがたは、兄弟なのだ。それなのにどうしてお互いに傷つけ合っているのか』と言いました。

7:27 すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけてこう言いました。『だれがあなたを、私たちの支配者や裁判官にしたのか。』

7:28 きうエジプト人を殺したように、私も殺す気か。』

7:29 このことばを聞いたモーセは、逃げてミデアンの地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけました。

7:30 四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山の荒野で柴の燃える炎の中に現れました。

7:31 その光景を見たモーセは驚いて、それをよく見ようとして近寄ったとき、主の御声が聞こえました。

7:32 『わたしはあなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』そこで、モーセは震え上がり、見定める勇気もなくなりました。

7:33 すると、主は彼にこう言われたのです。『あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたの立っている所は聖なる地である。』

7:34 わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。さあ、行きなさい。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。』

7:35 『だれがあなたを支配者や裁判官にしたのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は柴の中で彼に現れた御使いの手によって、支配者また解放者としてお遣わしになったのです。

7:36 この人が、彼らを導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年間荒野で、不思議なわざとするしを行いました。

7:37 このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる』と言ったのです。

7:38 また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野の集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。

7:39 ところが、私たちの父祖たちは彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく思って、

7:40 『私たちに、先立って行く神々を作ってください。私たちがエジプトの地から導き出したモーセは、どうなったのかわかりませんから』とアロンに言いました。

7:41 そのころ彼らは子牛を作り、この偶像に供え物をささげ、彼らの手で作った物を楽しんでいました。

7:42 そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の星に仕えるままにされました。預言者たちの書に書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ。あなたがたは荒野にいた四十年の間に、ほふられた獣と供え物とを、わたしにささげたことがあったか。』

7:43 あなたがたは、モロクの幕屋とロンパの神の星をかついでいた。それらは、あなたがたが拝むために作った偶像ではないか。それゆえ、わたしは、あなたがたをバビロンのかなたへ移す。』

7:44 私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました。

7:45 私たちの父祖たちは、この幕屋を次々に受け継いで、神が彼らの前から異邦人を追い払い、その領土を取らせてくださったときには、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ついにダビデの時代となりました。

7:46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの神のために御住まいを得たいと願い求めました。

7:47 けれども、神のために家を建てたのはソロモンでした。

7:48 しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりにです。

7:49 『主は言われる。天はわたしの王座、地はわたしの足の足台である。あなたがたは、どのような家をわたしのために建てようとするのか。わたしの休む所とは、どこか。』

7:50 わたしの手が、これらのものをみな、造ったのではないか。』

7:51 かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。

7:52 あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったのでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。

7:53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

7:54 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ざしりした。

7:55 しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、

7:56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

7:57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。

7:58 そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。

7:59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」

7:60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。

8:1 サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

はじめに

ステパノの殉教は、使徒の働きの手紙における大きなターニングポイントです。

非常に悲しい出来事ですが、この物語にはサウロが登場します。このサウロは、異邦人教会を開拓する宣教師となる人物です。

ステパノの殉教の後に起こる迫害は、福音をサマリヤの地に携える手段として神に用いられました。

そして、この迫害によって、ついにはアンテオケに異邦人教会が誕生します。（使徒 11：19-20）

もうひとつ注目すべきは、今日の個所でステパノが語ったキリスト教信仰の弁証です。これは、新約聖書の中に記されたキリスト教信仰の弁証でもっとも長い記述です。

ステパノは非常に興味深い方法でキリスト教信仰について論じました。

彼が用いた福音の提示方法について、今日の最後の適用でお話しようと思っています。

今日の個所の学びに入る前に、少しステパノという人物についてお話しておきましょう。

ステパノという名は、「冠」という意味です。

彼は、使徒 6：5 で任命された執事のひとりでした。ですから、彼が信仰面でも生活面でも霊的に成熟した人物だったことがわかります。

ステパノは、「御霊と知恵とに満ちた」（使徒 6：3）「信仰と聖霊とに満ちた人」（使徒 6：5）であると評されていました。

また、不思議なわざとするしを行う力を持っており（8 節）、知恵によって語ることができました。

（10 節）

ステパノに関するルカの表現からは、ステパノが旧約聖書のモーセと似た資質を持っていたことが伺えます。

ステパノは明らかに、初代教会において驚くべき業をなされる神に突き動かされていました。

彼は福音に徹底的に忠実であったのに、その人生は突然幕を閉じました。とても悲しいことですが、彼の人生と奉仕は人々の人生にインパクトを与え、その人々が後に神に用いられるようになったことに、慰めを感じます。若くして命を落としながらも、その生き方によって今も人々に勇気を与え続ける信徒たちが、キリスト教の歴史には数多く存在します。

デイヴィッド・ブレイナード（1718-1747 年、29 歳で死去）

国の北東部に住むアメリカンインディアンへの宣教師だったブレイナードは、ピューリタン派の家庭で生まれ育ちましたが、子どものころはずっと反抗的でした。しかし、20 代前半のある日、森を歩いていて、自分自身が救いを必要とする失われた罪人であることに気づきます。

彼はイェール大学に進学し、1742年に牧師の免許を取得します。そして、あらゆる困難にもかかわらず、大胆かつ献身的にアメリカインディアンへ宣教しました。しかし、29歳の若さで肺結核で亡くなり、その宣教の働きはわずか2年で終わりました。その人生と信仰の日記は、1749年にジョナサン・エドワーズが「デイヴィッド・ブレイナード：師の生涯と日記」を出版したことで世界的に知られるところとなりました。この本は、古典信仰書となり、今も人々の心を宣教の働きへと動かしています。英国からインドに赴いた有名な宣教師ウィリアム・ケアリーも、ブレイナードの生き方に大きく影響を受けた人のひとりです。

ロバート・マーレイ・マクチェーン (1813-1843年、29歳で死去)

マクチェーンは、1835年から1843年までスコットランド国教会の牧師でした。エジンバラ大学を卒業後、1835年に説教者の免許を取得しました。パレスチナのユダヤ人に向けた宣教活動に強い興味を持っていました。また、スコットランドや北イングランドで数々の伝道集会を開きました。

若くして亡くなりましたが、伝道者としても牧師としても、神の御国に大きく貢献しました。「神が祝されるのは、素晴らしい才能よりも、イエスに似た者とされた性質である。聖い働き人は、神の御手に用いられる強力な武器だ」等、多くの名言を残しています。

「ロバート・マーレイ・マクチェーン回顧録」は、多くの人々に感動を与えました。その一例が、ジョナサン・ゴーフォース (1859-1936年) です。彼は、この本を読んで宣教と伝道に献身し、中国と韓国における何十年にもわたる働きは神に大いに用いられました。しかし、彼はその働きのために大きな犠牲を払いました。中国に滞在中、11人の子どものうち、5人を亡くしました。

ステパノは、その短い人生によって未来の人々にインパクトを与えた最初の人物です。ですから、ステパノについての今日の学びはとても大切です。

この情報を念頭に、今日の聖書個所の学びに入りましょう。

今日の個所では4つの点に注目していきます。

1. ステパノに対する告発 (6:8-15)

8節から、ステパノが精力的に奉仕していたことがわかります。

たくさんの奇跡を起こしていただけでなく、教える奉仕もしていたはずで。

彼は、神の選民についてしっかり学んでおり、福音をちゃんと理解していました。

10節には、会堂の指導者たちでさえ、ステパノの知恵に対抗できなかったとあります。

聖霊は、ステパノの働きをとおして大きく働いておられました。

それで、ステパノの働きがもたらす影響を止めることができなかった宗教指導者たちが、彼の教えについてうその証言をするよう人々をそそのかしました。

そして、ステパノがモーセと神とをけがすようなことを言ったと言わせて騒動を起こしました。

ここで彼らが主張しているのは、ふたつのことです。

a) ステパノはモーセをけがしている、という非難。これは、モーセの律法に反することを話したという意味です。(6:11,3) イエスの働きがモーセの伝えた慣例を変えるという内容をステパノが話した、という非難です。(14節)

b) ステパノは神をけがしている、という非難。これは、宮に逆らうことを話したという意味です。(6:11,13)

イエスが神殿を壊すとステパノが言ったという偽証がありました。

このような疑惑を聞いたエルサレムの人々は、大騒ぎしたでしょう。

彼らの暮らしは、宮と律法に依存していたからです。(6:12)

イエスも同じ内容で同じ議会に告発されたことは興味深い点です。

マルコ 14:58

14:58 「私たちは、この人が『わたしは手で造られたこの神殿をこわして、三日のうちに、手で造られない別の神殿を造ってみせる』と言うのを聞きました。」

これは真実ではありません。ヨハネ 2:19 に記されたイエスのことばを見ると、イエスが実際に何と言われたかがわかります。

ヨハネ 2 : 19

2:19 イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」

ユダヤ人の議会は、14 節でステパノの言葉も誤って引用しています。
そのことは、13 節を読めばわかります。

使徒 6 : 13

6:13 そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。」

ステパノは、神のみことばの真理を信じる信仰のために責められていました。
彼が信仰を守り、真理を語ったので、神はそのことを尊重してくださり、彼の顔を御使いのように輝かせてくださいました。

これは、出エジプト 34 : 29 でモーセにも起こったことです。

神の恵みがステパノの上にあったのは、彼が真理を心得て、その真理を語り、自らの命の危険を顧みずにその真理を宣言したからです。

私たちはどうでしょう。

私たちは真理を知っているのでしょうか。迫害等、何か不都合なことがあるとしても、真理を語るのでしょうか。

神を受け入れない世の中に福音を携えていきたいと思うなら、それが私たちに課された課題です。
福音を語れば、必ず否定的なことを言われるでしょう。イエス・キリストの福音に抵抗する人は、サタンの用いる手先だからです。

マタイ 16 : 21-23 でペテロがそうと知らずに福音に抵抗したとき、イエスは彼を叱られました。

マタイ 16 : 21-23

16:21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。

16:22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」

16:23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

私たちは、聖書の中で示された神のみこころに反していないか慎重になる必要があります。もし逆らうなら、聖書の神に逆らうことになるからです。

ユダヤ教指導者のステパノに対する告発内容を大きくふたつに分けると、モーセをけがすことばと、神と神の御住まいであるエルサレムの神殿をけがすことばを話したことです。

これは深刻な内容ですから、ステパノは自ら申し開きをしなくてはなりません。

2. ステパノの抗弁 (7 : 1-53)

最初にお話したように、ステパノが語ったキリスト教信仰の弁証は、新約聖書でもっとも長いものです。

ステパノの抗弁は3つに分けることができます。

そのひとつひとつを見ていき、旧約聖書の歴史を振り返るとともに、新約聖書の真理を提示するためにその史実が必要であることも確認します。

a) 族長時代 (ヨセフに見る救世主) —2-16 節

これは、アブラハム、イサクからヨセフまでの時代の話です。

この話は、ヤコブとヨセフの死で終わります。ふたりの遺体はエジプトから運び出され、イスラエルにあるシケムのアブラハムの墓に埋葬されたと語ります。

このユダヤ民族の始まりに関する話をユダヤ人議会に話したのはなぜでしょう。

まず、ステパノ自身ユダヤ人ですから、彼らと同胞であることを改めて確認するためです。

ステパノは、9 節でヨセフについて語り、冒とくの告発について触れました。

使徒 7 : 9

7:9 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売り飛ばしました。しかし、神は彼とともにおられ、

神がヨセフとともにおられ、彼を助け出され、知恵と成功を与えられました。

ヨセフは奴隷として売られました。けれども最終的には、当時は 75 名という少人数ではありましたがユダヤ民族の救世主と認められました。

b) モーセの時代 (解放者) —17-43 節

この個所で、ステパノはモーセの人生について語ります。

これは大まかなあらすじですが、モーセがかわいい子で (20 節)、平和と和解をもたらした人物であることに言及しました。しかし、モーセもまた、同胞から拒絶されました。(24-26 節)

ユダヤ人は、モーセに再会した時初めて、彼を解放者と認めました。

使徒 7 : 35

7:35 『だれがあなたを支配者や裁判官にしたのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は柴の中で彼に現れた御使いの手によって、支配者また解放者としてお遣わしになったのです。

モーセは神の民に律法と契約をもたらしました。

これは、神の生けることばであり、生きる指針とすべきことばです。

しかし、ユダヤ人は神と神のみことばを退け、命のない子牛の偶像を慕いました。(41 節)

このふたつの話をつなげて、ステパノがどのようにユダヤ人の議会に理解を求めようとしたのかを考えましょう。彼は、自分たちの歴史と宗教に隠された真理を用いて、話しました。

モーセの話とヨセフの話をつなぐキーワードは、「救世主」「解放者」です。

ヨセフは、75 人のユダヤ人を飢餓から救いました。

ヨセフがそうしていなければ、ユダヤ人にも異邦人にも救い主はいません。

モーセはエジプトでの奴隷生活からユダヤ人を救いました。ヨセフの話から 400 年時代が下り、彼が救った人々は 200 万人を超えます。

彼らはどちらもユダヤ民族の「救世主」「解放者」です。けれども、人々はこのふたりが救ってくれるとは気付きませんでした。

このステパノの話は、51-53 節でクライマックスを迎えます。

ここでひとつ、実践につながる応用ポイントがあります。

神が選んで神の民のために送ってくださる人は、必ずしも神の民に認めてもらえません。また、指導者の言葉を聞くとは限りません。

旧約聖書の預言者がその良い例です。

世界中の牧師や教会リーダーの多くが、神の民から拒絶されたという体験談を語ります。

彼らは、素晴らしいメッセージを語り、教会が信仰成長を遂げて前進できるような機会を提供したにもかかわらず、そのように扱われます。

残念ながら、そのような教会の人々は、指導者を拒んで、自分たちにダメージをもたらします。

c) 幕屋と神殿の時代 (44-50 節)

この個所で、ステパノは、ユダヤ人が神殿を偶像にしてしまったと指導者たちに指摘します。

その際、神は建物に収まるお方ではないと教えるイザヤ書 66 : 1-2 を引用します。神は遍在のお方だからです。

言い換えるなら、聖書の神だけが、同時にあらゆる場所に存在できるお方だということです。ユダヤ教指導者が神をひとつの場所に閉じ込めるために神殿を利用した、とステパノは言っていたわけです。

つまり、神をけがすことを語っているのはむしろ指導者である彼らだということです。彼らは、同時にあらゆる場所に存在できる神の力を認めようとしていなかったからです。

私たちが日曜日に集まって神を礼拝できるのはすばらしいことです。けれども、私たちはいつでも家で神を礼拝することができます。賛美チームがいなくても、静思の時に賛美歌を歌うこともできますし、聖書を読むことも祈ることもできます。日曜礼拝の時だけ神を礼拝するのはよくありません。聖書の神は一日 24 時間いつでもどこでも私たちの礼拝を受け取ってくださるお方です。

当時の宗教指導者たちに関するステパノの結論は、7 : 51-53 に記されています。

使徒 7 : 51-53

7:51 かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。

7:52 あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。

7:53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」

ステパノの主な見解は、指導者たちが神の聖霊の働きを否定しているというものでした。これは、指導者たちにとって厳しい非難ですが、そのとおりです。教会でも同じことが起こり得ます。指導者として任命された責任ある立場の人が、実際には聖霊の働きを否定する場合があります。

3. ステパノの死 (7 : 54-60)

信仰のためにクリスチャンが殉教するのは残念なことです。現代でも世界中で起こりますが、とくにイスラム教の国で起こっており、とても悲しい出来事です。

けれども、同じ神を礼拝しているという人々によって殺されるのはさらにつらいことです。

では、この個所から私たちの励みとなる事柄を見つけられるでしょうか。

まず注目すべきことは、指導者たちが怒っていたことです。(54 節)

彼らの態度から励まされることはありませんが、その反応を見ると、聖霊が彼らに罪を示しておられたこと、そして心のうちになされた聖霊の働きを彼らが拒んだことが少なくとも伺えます。

神の真理を心に受け入れたくないときに人は怒るようです。

神の真理に腹を立てるのは、神に対する反抗心のしるしです。

英国で 250 年以上前に神に仕えた有名な伝道者チャールズ・ウェスレーは、訓練生たちを伝道に送り出す前に次のように教えていたそうです。福音を語るためにでかけるときは、聖霊の力によって語らなければならない。聖霊の力で語るなら、二種類の反応があるはずである。腹を立ててののしるか、クリスチャンになりたいと望むかのどちらかである。

チャールズ・ウェスレーは、そのような反応がまったくくないなら、伝道者として召されていないのかもしれない、とまで言ったそうです。

これには頷ける部分もあります。人が腹を立てるのは必ずしも悪いことではありません。神が働いておられるしるしの可能性もあるからです。

コリント第二 2 : 14-16

2:14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。

2:15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。

2:16 ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。

55-60 節には、ステパノの死が記録されています。

使徒 7 : 55-60

7:55 しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、

7:56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」

7:57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。

7:58 そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。

7:59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」

7:60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。

ここで興味深いことは、ステパノが見たものとステパノが語ったことです。

55 節には、ステパノが天の神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見たがあります。

ヘブル 10 : 2、エペソ 1 : 20、そしてコロサイ 3 : 1 を読むと、イエスが神の右の座に座っておられるとあります。これらの意味は、イエスが高く掲げられた栄誉と権威の位についておられたということです。

けれども、ステパノはイエスが神の右に立っておられると言います。

イエスが座るのではなく立っておられた理由については、聖書注解者の間で諸説ありますが、この状況でもっとも適した説明は、ステパノがイエスについて語ったので、今度はイエスがステパノについて、イエス・キリストの福音のために死を覚悟したしもべであることを父なる神に語ってくださる、ということではないでしょうか。

神を尊ぶ人を神が尊んでくださると、聖書は教えます。

サムエル記第一 2 : 30

2:30 それゆえ、——イスラエルの神、【主】の御告げだ——あなたの家と、あなたの父の家とは、永遠にわたしの前を歩む、と確かに言ったが、今や、——【主】の御告げだ——絶対にそんなことはない。わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。わたしをさげすむ者は軽んじられる。

ですから、ステパノの信仰と犠牲をいとわずに従った従順さをイエスが尊んでくださったのだと私は信じます。

私たちも信仰によって踏み出し、神を尊んで、イエス・キリストの福音を告げるなら、神が私たちを尊んでくださいます。

59 節は、ステパノが石打ちに遭い、「主イエスよ。私の霊をお受けください。」と言いながら死んだと語ります。

ステパノの祈りは、イエスが死の直前に祈られたことと似ています。（ルカ 23 : 46）

違いは、これがステパノの最期の言葉ではなかったことです。彼はもうひとつ大切な言葉を残しています。

「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」

イエスが十字架にかけられて最初に語った言葉が、ステパノの最期の言葉となりました。（ルカ 23 : 34）

違いは、イエスは父なる神に呼びかけたのに対し、ステパノはイエスに対して呼びかけている点です。

ステパノは、イエスと神とを同一視していました。イエスは人の姿をした神です。

ですから、ステパノが殺された罪を人々に負わせないでくださいとイエスに願ったのは立派なことです。けれども、罪を赦していただくためには、罪を犯した本人がイエスに直接赦しを願わなければなりません。

残念ながら、ローマカトリック教はそうに教えていません。

ジョセフ・ザッケロ氏は、「キリストと出会った司祭」というトラクトの作者です。彼はその中で次のように語ります。

「私は、キリストに直接祈らず、マリヤや聖人に祈りなさいと教えていました。けれども、心の中で声が聞こえました。十字架であなたを救ったのは誰か。代価を支払うために血を流したのは誰か。マリヤか、聖人か、それとも、このわたし、イエスカ、と。…
たくさんの方が私のもとに来てひれ伏し、私に罪を告白しました。
そして私は、十字架をかざして、罪を赦す力が私にはあると人々に約束していました。
罪人で人間である私が、神の立場に立っていたのです。
心の中の声は私に言いました。あなたは神の栄光を横取りしている、と。
罪人が赦しを得ようとするなら、あなたのところではなく、神のもとに出なくてはならない。
人々が犯したのは神の律法なのだから。
だから彼らは神に罪を告白しなくてはならない。神にのみ、赦しを求めて祈るのだ。
罪を赦すことのできる人はいない。しかし、イエスは罪を赦す力があり、赦してくださる。」

そして、元カトリック司祭である著者は、テモテ第一 2:5 を引用します。

テモテ第一 2:5

2:5 神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

改宗した元カトリック司祭は、次のように続けました。

「もはやローマカトリック教会にとどまることはできませんでした。キリストと法王というふたりの主人に仕え続けることはできないと思ったからです。

ふたつの矛盾する教え、伝統と聖書を両方とも信じることはできません。

キリストか法王か、伝統か聖書か、選択を迫られました。

それで 1944 年にローマカトリックの司祭を辞任し、ローマカトリック教を離れました。今は、聖霊に導かれ、ローマカトリック教徒に伝道しています。」

The Priest who found Christ by Joseph Zacchello.

Free Tract Society, P.O. Box 50531 – L.A. California 90050.

より抄訳

4. ステパノの死が成し遂げたこと (8:1)

8 章 1 節には、重要なことがふたつ書いてあります。

ひとつめは、サウロがステパノを殺すことに賛同していたことです。

サウロという若者がそこにおいて、ステパノの証を目撃しました。

9 章では、この若者が救われ、神の聖霊によって大いに用いられるようになる話が聞けます。

ふたつめは、この出来事から教会に対する迫害が起こり、クリスチャンがユダヤとサマリヤの各地に離散したことです。

この迫害が、世界宣教を発展へと導きました。

ユダヤ人の信徒は、ユダヤとサマリヤの各地へ旅することを余儀なくされました。そこで彼らは、イエスについて伝えたのです。

適用と結論

1. イエスの福音のメッセージを伝えるときは、旧約聖書と切り離してはいけません。

創世記にある最初の話や、神の選びの民であるユダヤ民族についての知識が必要です。

イエスはユダヤ人です。そして、この地上に戻ってこられるときもユダヤ人として再臨されます。ですから、私たち信徒は自らを、神が選びの民から始められた働きの中に後から追加された者と考える必要があります。

ローマ人への手紙 9-11 章を読むと、神がイエスをとおしてご自身の民に救いをもたらずご計画を持っておられることがわかります。

神がアブラハムを選び、ユダヤ人と呼ばれる子孫を与えて祝福されなければ、異邦人にも救いはなかったでしょう。

旧約聖書の歴史と預言は、新約聖書のイエスによる恵みの福音を理解する上で重要です。

私が 20 年以上その方法を取ってきたのはそういうわけです。

「この名によって」という本はアジア人にとって文化的にデリケートな内容ですが、多くの言語に訳されています。日本語の完全訳はありませんが、伝道目的の短い抄訳があります。

2. 日本で暮らし、仕事をしている人にとって、同僚を始め、関わりのある人に福音を伝えるのは常に難しい部分があります。

けれども、イエスを信じる信仰を証することを敬遠してはいけません。これは私たち全員への課題です。機会を祈り求め、イエスについて伝える機会が与えられたら生かしましょう。自分自身の信仰の証をいつでも語れるように用意しておくのは良いことです。9月5日に、ロンドンのヒースロー空港までタクシーにりましたが、そのドライバーは、約10年前にアフガニスタンから逃げてきた人でした。

彼は、英国がどんな宗教にもオープンであることはとても良いことだと言いました。

私はその人にイエスのことを語れませんでした。息子のアンドリューに頼んで、「この名によって」の本を彼に送ってもらおうと思っています。カーンという名のそのドライバーは英語も読めるので、いつかイエスを知ってくれたらと願います。

私はこれからもカーンさんのために祈りますが、これからはいつもトラクトをいくつかカバンの中に常備しておこうと思います。

3. 良くない状況から良いことをなせる神に励ましをいただきましょう。

神は主権者なるお方で、私たちの人生も、まだクリスチャンでない人の人生も、統べ治めるお方です。

今日の個所には、クリスチャンになる前に教会の迫害に加担するサウロという若者が登場しました。

この迫害のおかげで、教会は各地に広がりました。

私たちの教会は人の出入りが激しい教会です。これは不安定だとも残念だとも思えるでしょう。

けれども、神はご自身の御国を広げるために、人をあらゆる場所や働きへと動かされます。

神の導かれるところならどこへでもついていきたいと私たちが思うことができますように。神につき従う私たちに、神の祝福がありますように。